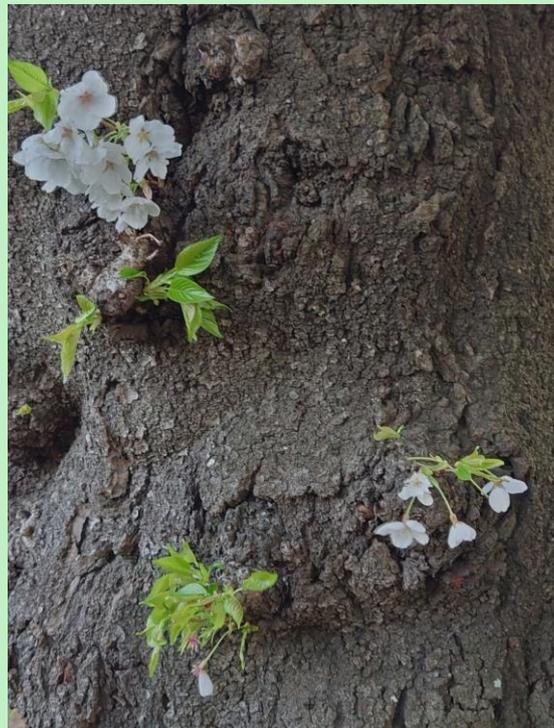


いわき市の戦禍にみる 東京大空襲と長崎原爆

江尻宏泰

<http://hiro-ejiri.com/>



はじめに

1945年3月10日、東京大空襲の一機が北上し、いわき市の住宅街を焼いた。わたくしが育った街だ。

同年7月26日、ポツダム宣言の日、いわき市の小学校と周辺住宅が長崎と同じ型の模擬原爆爆弾で壊滅した。わたくしの母校である。

まもなく第二次世界大戦（太平洋戦：大東亜戦）の敗戦の日から80年、日本国内ではいわゆる旧来の戦争はない。しかし北方4島や竹島は、戦争ではなく一方的に不法占拠されたままだ。

大戦前の80年は、幾多の戦争があり、悲惨な戦禍が絶えなかった。戊辰戦争・西南戦争（1868－70）、日清戦争（1894－95）、日露戦争（1904－05）、第一次大戦争（1914－18）、日中戦争（1937－45）、等々だ。

第二次大戦争後も、日本以外では、朝鮮戦争、ベトナム戦争、中東戦争、イラク戦争、アフガニスタン戦争、アフリカ内戦、等々が続いた。現在もウクライナやガザで悲惨な戦争が進行中だ。

戦争や革命では、1000万人規模の軍人と民間人が犠牲になる。第2次大戦は4000－5000万人、中国の文化革命では2000万人の犠牲者が出た。

戦争は、合理性も正当性もなく、悲惨な犠牲と破滅をもたらす。戦争は、させてもしてもいけない。しかし、させないために、しないために、その他さまざまな「大義」で戦争が絶えない。

1860年代の戊辰戦争は日本を2分しての凄惨な戦争、双方が「正義」のために戦った。それから80年の1940年代、第2次大戦では海外の諸島と日本全土が悲惨な戦禍にまみれ、将兵と民間人を合わせて310万人が犠牲になった。欧米とアジアの各国でも、多くの犠牲者がでた。すべての犠牲者のご冥福を祈りたい。

戦後80年、日本では戦争経験者が年々急速に少なくなっている。戦中、海外や沖縄では地上戦があり、多くの方々が犠牲になった。本土では、空中戦、砲撃・銃撃、空襲、等々があり、たくさんの民間人や住居にも甚大な被害があった。戦後は、占領、食料難、物資不足、教育干渉、研究禁止、等々で全国民が辛酸の限りを尽くした。

第2次大戦をじかに体験し、記憶している人たちも、多くは他界し、現存している方も、90歳前後かそれ以上である。まさに戦中戦後を生き抜き、戦後復興を成し遂げた数少ない「高貴高齢者」だ。

第二次大戦は、1936年生まれのわたくしが5歳から9歳の時。幸い、大きな戦禍はまぬがれたが、貴重で奇特な戦争体験をし、おおくは鮮明に心に残っている。

戦後、原子核研究の道に入り、欧米の大学に勤務する機会があり、海外の研究者と戦争や原爆の議論をした。

それらを少しでも記録に残そうと思いたって書いたのが本文である。戦争についての考えではなく、主に実体験のファクト（事実）を書いた。いささかでも参考にしていただければ幸いである。

I. 真珠湾とシンガポール陥落

1941年、既にヨーロッパでは第2次世界大戦がはじまり、アメリカ参戦の議論がわき、アジアでも不穏な緊張が高まりつつあった。

エネルギー資源のない日本は、石油を求めて東南アジアに進出、それに対し7月にアメリカは石油全面禁輸し、エネルギー戦争が始まった。日本は、アジアからの石油獲得を妨げるハワイの米艦船を攻撃した。大東亜戦争（太平洋戦争）のはじまりである。

真珠湾では1割は成功したが9割は大失敗に終わった。すなわち大敗戦である。米艦船を叩いたが、既に電波傍受で知っていたアメリカ政府は、それを「不当な奇襲」として、参戦の「正当」な理由として参戦、続いて欧州にも参戦。全世界の主要国が戦争に入った。

エネルギー禁輸も真珠湾攻撃も、人権人命を無視する強硬手段で許されないことはいうまでもない。開戦前後のことは、既に多くの人々によって論じられ、著書にかかれているのでここではふれない。

1942年2月のシンガポール陥落や世界最強のゼロ戦の大活躍に日本国中が湧いた。しかし、同年6月のミッドウェイ海戦や、その後のガダルカナル戦等々で敗北が続

き、1945 年はじめ頃までには日本の陸海軍（空軍を含む）の戦力はほぼ失われた。

II. サイパン島陥落と焦土戦

1944 年、わたくし 8 歳。西太平洋では敗戦が続き、農家の長男以外の成年男子の多くが戦地で次々になくなっていった。母は親戚が亡くなるたびに、泣いていた。家では庭先に防空壕を掘り、灯火管制や消灯につとめ、米飯に大根を入れて空腹をしのぎ、小学校では、空襲時の避難訓練がつづいた。

1944 年 6 月、サイパン島が陥落、米軍はその南のテニアン島に飛行場を建設、B29 爆撃機による本土空襲が本格化した。11 月には東京空襲が行われている。本土焦土作戦の始まりだ。

奇しくも同年 11 月、父は赤紙召集を受け、会津連隊にはいり、軍医としてフィリピンにむかった。すでに制空権はなく、フィリピンに向かう船団は米軍機の攻撃を受け、父の乗った船は急遽進路を変えて台湾は高尾に向かった。

江尻医院は、1937年にいわき市（旧平市）で開業したが、父の応召によってわずか7年で閉院。瀟洒な洋風の医院と池のある和風の自宅をたたみ、母のさとの茨城県の霞ヶ浦北岸にある一軒家に疎開することになった。1944年の暮れ、一家は馬車に揺られながら夕暮れの湖畔を下って行った。

井戸水を汲み、薪を造って炊事をし、田植えや芋ほりに汗を流す毎日が続いた。受験用の塾も教育無償化もなかったが、家事の工夫で脳を訓練、米がなくても我慢して心を鍛え、田畑で汗を流して体力向上。この時代を生きぬいた人は、脳心体が大変強い。だから30年で復興をやり遂げた。

III. 東京大空襲といわき市炎上

霞ヶ浦の対岸は、阿見町で、そこに霞ヶ浦海軍航空隊と予科練（海軍予備飛行練習生）があった。全国から俊才をあつめて特訓を行ったところである。その8割は帰らぬ人となった。多くは、特攻として散った。

阿見町には予科練平和祈念館があり貴重な資料を公開している。また隣接して雄翔館があり若者の遺書や手紙

を視ることができる。文字に書かれていない思いが胸にしみる。

1944年から45年にかけて、霞が浦上空では華々しく空中戦が行われた。まもなく迎え撃つ飛行機も底をつき、空中戦もなくなった。そして東京空襲の任務を果たしたB29は、上空を悠然と帰っていった。

1945年3月10日0時—2時40分、東京大空襲。霞ヶ浦の南岸の空が真っ赤に染まった。村人が集まってきて燃える空を見て息を凝らした。しばらくすると遙か上空を任務を果たしたB29が整然と編隊を組んで鹿島灘へ抜けていった。

東京大空襲は、次の5点で世界に例の空襲である。

1. 1回2時間余の空襲の犠牲者は、民間住民の約10万人。胎児を含めると更にふえる。原爆と同程度で、西欧での大戦の空襲の1桁おおい大惨劇だ。
2. 300機程のB29機による、わずか1000トンのM69型の焼夷弾（33万発程度）による爆撃で、極めて多くの犠牲者がでた。焼夷弾1トンあたりの犠牲者は、爆弾1トンあたりの犠牲者数の数十倍だ。各戸あたり1個の割合で投下された焼夷弾は、点火剤で、27万戸の住宅が燃料となり、殆どの住民は、燃

える住宅の火の高熱で焼死した。爆弾の場合は、ほとんどが爆弾による直接死である。

3. 無差別ではなく、東京の木造住宅密集地が選択的に対象になり、40 平方キロメートルが焼失。犠牲者の多くは、どこに逃げても火の海で、500－1000 度という高温に長時間さらされて息絶えた。一発で一瞬の数千度の超高温で同数の犠牲者を出した原爆とことなるが、いずれも非人道を極めた暴挙だ。

東京大空襲は、世界の戦争の中で極めて異例な惨劇だが、それを記録する資料は乏しく、そのための公の記念資料館はない。2002 年になって、現地の一角に東京大空襲資料センターがスタート、ボランティアにささえられながら、貴重な活動を行っている。最近、学芸員の比江島氏と話す機会があった。

1945 年 3 月 10 日 2 時頃、東京大空襲で第 1 の任務果たせなかった B29 はさらに北上、いわき市（旧平市）の木造住宅密集地を選び、焼夷弾で点火、材木町、鍛冶町、研町、紺屋町、梅本町一帯の民間住宅を焼いた。その高熱で死者 12 名、家屋 500 戸以上が炎上。その中

の半数が防空壕にとどまってなくなった一家だ。

東京大空襲の規模は、いわき空襲と比べて、飛行機数は300倍、焼失戸数は500倍、しかし、犠牲者は6000倍だ。同じ日の同じタイプの空襲で、東京の犠牲者が焼失戸数あたり10倍以上多いのは、東京が消火に努めたからではなく、規模が大きく、逃げた先も火の海の高温だったことによる。10人に1人が犠牲になった。いわきでは、大多数が火から逃れたが、100人に1人が犠牲になった。

その後、空爆による焦土作戦は各市で執拗に繰り返された。いわき市では、1945年7月28日に駅前一帯が焼かれた。敗戦間際の半年に3回の空襲だったが、いずれも小学校や住民が対象で、発電所や工場等が爆撃されることはなかった。

IV. 模擬原爆による小学校爆破と敗戦

1945年、本土の焦土作戦はほとんど全市におよび、時には艦砲射撃で、沿岸近くの軍艦から大砲で砲撃され

た。疎開さきでも、1945年7月17日深夜から18日にかけて、近くの水戸が攻撃される爆音を一晚中聞いた。

この頃に空爆や砲爆を経験している人は、同様な目に合っているウクライナやガザの住民に対し、特別な思いを寄せている。

戦中の空爆や砲撃は、主に住民が対象で、農村の田畑が被害を受けることはあまりなかった。但し、一家で農業を営むのが普通の農家では、働き盛りの青壮年男子が戦地に赴き、青年女子は軍需工場で働き、農業の担い手がなく苦勞した。

一方、わたくしのような場合、父は外地で軍医として勤務、残された家族は無収入で、母はある時は帯を芋に変え、ある時は着物を売って米を買い、子供を飢えさせないことに必死だった。すでに指輪や扇風機などの金属でできたものは、砲弾ようとして供出していた。

ただ、近隣の祖父母や叔父叔母が、何かと助けてくれた。もちろん、政府からの給付金は無かったが、親族間の固い団結があった。

国外に展開中の主戦力は壊滅、沖縄でも破れ、同盟国のドイツも壊滅、中立条約を結んでいたソ連を通して戦争終結の交渉が進められたが、想定（外？）の200%裏切にあい、万事休す。

一方、米英中の3国とソ連はポツダム宣言を通告、無条件降伏を迫った。7月26日である。

当時の政府も軍部も、戦力も情報力もほとんど失い、急速に進む原爆投下計画を知る由もなく、国体維持が可能かどうかの検討に日数を使ったことが悔やまれる。

奇しくもポツダム宣言発布と同じ7月26日、いわき市の平第一国民学校（現・平第一小学校）に5トン爆弾（パンプキン爆弾）が落とされ、小学校と周辺の住宅一帯が破壊された。わたくしの母校である。

犠牲者は教員3名、負傷者は60名、家屋1500戸以上が破壊された。さいわい、高等部の生徒は避難して全員無事だった。

目的は長崎と同型のプルトニウム原爆の投下テストだが、アメリカの公式記録は軍需工場爆破とされた。

犠牲者の一人は渡辺壽重校長、皆を避難させ、自分は校舎に踏みとどまった。山田鉄子先生は既に夫を戦場で亡くし、自身は顔面に大きな傷を負った。二人の先生はわたくしの入学時の校長先生であり、担任の先生だ。いつまでも脳裏に焼き付いている。



上図 丸印。投下された平第一小学校。その下が3月10日の被災地。註「写真が語る原爆投下」工藤洋三・奥住善重

1938年、ドイツのハーンが、原爆の原理である原子核分裂を発見、原子力を利用した超強力な原爆の可能性が明らかになり、世界に衝撃が走った。アインシュタインがアメリカの大統領に、ドイツのナチスが成功する前に米国が原爆を作り上げるよう手紙を書いた。それを受け入れ、全米の原子核研究者が総動員され、原爆開発を急いだ。マンハッタン計画である。オッペンハイマー博士が指揮をした。

原爆は 1945 年 7 月にネバタ州で実験に成功。既にナチスは 6 月に崩壊。その前から日本での投下計画と準備が秘密裏に進められていた。

早くから、戦後の世界の覇権をめざし、原爆による戦力示威用に、新潟、京都、広島、小倉、長崎の 5 市が選ばれた。そこでは通常空爆はおこなわれず、原爆投下テストが 5 市の周辺の都市で行われたことが、最近開示され米軍の資料を基に書かれた記事によってわかった。

いわき市はその一つで、他にも幾多の市の大型施設を狙って入念なテストがおこなわれ、1000 人ほどが犠牲になっている。

8 月 6 日に 64 kg のウラニウム 235 からなる原爆を広島に投下、同 9 日に 6 kg プルトニウム 239 からなる原爆を長崎に投下。それぞれ、TNT—15kt と TNT—21 kt に相当。

焼失面積や住宅戸数は東京大空襲の 10 分の 1 だが、ほぼ同数の 10 万人余の犠牲者数だ。超高温で、九死に一生を得た方もいない。東京では超広域が高温で九生一死、いわきは九十九生に一死である。いうまでもなく犠牲者にとっては一死あるのみである。

14日に無条件降伏受諾。15日玉音放送。9月2日降伏調印、終戦。但しソ連の不法侵攻は9月5日まで続き、違法抑留は13年続いた。

V. 敗戦後の復興

敗戦を台湾は高雄で迎えた父は、幸い蒋介石総統の適正な処遇で1946年3月に無事帰還。台湾とは戦時下もその後も相互に敬う関係が続いている。わたくしも幾度となく台湾の大学に招待され、相互に親交を重ねた。

1946年に江尻一家はいわき市に帰り、前年の3月10日の空襲で全焼した跡地に、1947年に江尻医院を再興。戦前の貯金は超インフレで0になり、無一文からの出発だったが、広く浅く借金をして医院開業にこぎつけた。

原爆模擬爆弾で破壊された第一小学校も復興、1947年にわたくしはその小学校6年に復帰した。

父は70歳で医業にピリオドをうち、そのご20年余り禪の研究に打ち込んだ。

わたくしが東大卒業後に歩む原子核研究の道は、戦後は数奇な運命をたどった。戦中、理化学研究所、京

大、阪大では、原子核研究用の大型装置を用いて、原子核物理の研究が行われていた。大型装置は占領軍により原爆製造装置と曲解され、1945年11月に撤収、海中投棄され、原子核物理の研究禁止令が出された。

間もなくして、原子核物理研究の禁止が誤りであることがアメリカの物理学者から指摘され、アメリカ側からの勧告で日本の原子核物理研究が復活。1955年に、東大付置の原子核研究所が設立され、最新の原子核研究がスタートした。わたくしが研究をはじめた研究所だ。

尚、アメリカでは、イタリアから来た原子核物理学者のフェルミが1942年に原子力エネルギーを取り出すことに成功、1952年には原子力発電の実用化に成功した。日本でも1955年に東海に原子力研究者が設立され、脱炭素の原子力発電に成功。日本のクリーン原子力エネルギー利用のスタートだ。

これまでの世界の戦争は、石油等のエネルギー争奪戦争ともいえる。原子力の出現で、エネルギー戦争に終止符が打たれるはずであったが、フランスの他は、依然として石油等の化石燃料に頼り、世界はエネルギー問題と地球温暖化の危機にある。

日本では、原子力から石油等にシフトがすすみ、全世界が地球温暖化とエネルギーの危機にある。特に第二

次大戦の主要国である米、ソ、中、日、独の5か国が、大量の温暖化ガスを排出、再び地球上のすべての人々に犠牲を強いている。

温暖化ガスの犠牲者は毎年、東京、広島、長崎並みの犠牲者という。最近のロスアンゼルスや大船渡の山火事の面積は東京大空襲と同程度、毎年の水没面積はその十倍。地球炎上が迫っている。

太陽光は太陽内の原子核燃料利用によるもので、原子力と並んでクリーンエネルギーだ。日本はクリーン原子力があるのに、石油や天然ガスという危険エネルギーへのシフトを改めない。最近トランプ政権が掘って掘って掘りまくれとあって、化石燃料エネルギーにシフトしようとしている。ロシアは天然ガスを武器に領土侵攻をやめない。エネルギー戦争で「地球の悲劇」を繰り返してはならない。

わたくしは、宇宙のエネルギーの真理を究めようと、東大、同大学院をへて、原子核研究の道に進んだ。設立間もない原子核研究所で研究、1967年には、アメリカのワシントン大学に准教授として招待され、原子核の研究と指導に当たった。

当時のアメリカの原子核研究者には、マンハッタン計画で原爆開発に参画した研究者も多く、時々真珠湾や原爆が議論になった。当然、勝者の公式見解を信奉する研究者が大半だったが、それを疑問視する識者も少なくなかった。

日本でも、太平洋戦争については、占領軍の教育方針とおりの見解を反復する人がすくなくないが、かなりの人はそれに疑問を持っている。

原爆については、当時の日本軍は大規模戦力を維持しており、米兵 10 万人を救うために投下したというのがアメリカ側の公式見解とされた。

実際は、日本軍は既に 230 万人の将兵と殆どの陸海空の戦力を失い、継戦力は無にちかかった。因みにそれまでの米軍の犠牲者は 9 万人程で、陸海空軍の兵器は再生産され、十二分の戦力があつた。

また、東京大空襲でも、いわき、広島、長崎でも、対象は住民や小学校であつた。既に大規模戦力兵器は無に近かつたからである。また、広島投下のあと、日本側にそれを検証する時間を与えず、予定通り、連続してプルトニウム原爆の示威を長崎で敢行した。いずれも奇襲で事前通告はなかつた。すべて、米兵 10 万人を救うことと無関係である。

わたくしが最初に勤務した 1960 年代、アメリカ人の
おおくが、アメリカ政府の公式見解を信じていたが、す
でにかなりの原子核研究者が、それが偽りであることを
見抜いていた。

時はすぎて 21 世紀、再びアメリカの大学に勤務。当
時「イラクが大量破壊兵器を持って世界が危ない」とい
うブッシュ政権の公式見解を信じた人はほとんどいなか
った。実際、そのような兵器はなかったが、アメリカ政
府と軍はイラク殲滅を敢行した。東京大空襲や原爆と相
通じる。

20 世紀、多くの国がエネルギーを求めて戦火を交え
た。多くの住居が炎上、犠牲者は 1 億人にのぼる。住民
に犠牲を強いる戦争はしてはならない。

21 世紀、化石燃料エネルギーの多消費による温暖化ガ
スで、異常気象や山火事が頻発し、地球が炎上の危機に
ある。自然に犠牲を強いる戦争も、してはならない。

あとかき

最近いくつかの戦争関連の資料館を訪れた。靖国神社わきの遊就館、阿見町の子科練平和祈念館と雄翔館、東京大空襲資料館、等である。いずれも大変貴重な資料だ。おおくがわたくしの戦争体験と重なる。

ICU で心理学を教えている次女や東大工学部大学院の孫が、戦争の資料に興味をもっている。いくつかの資料館を一緒に訪れた。また、長男と次女の夫は、東大で、原子力の次世代クリーンエネルギーとしてフュージョンエネルギー開発研究と指導に取り組んでいる。大変ありがたいことと思う。

第二次大戦後、欧米の大学や研究所は、わたくしや家族を積極的に迎かいいれ、どこでも快適な研究生活を送ることができた。大変感謝している。

現在も、欧米とアジアの沢山の研究仲間と競い合いながら協同研究に楽しい日々をおくっている。

フェアな国際競争と国際協力、これが人類と地球の平和の原点である。

著者 江尻宏泰 1936 年生

<http://hiro-ejiri.com/>

大阪大学特任教授・名誉教授

プラハ大学客員教授

東京大学理学部 1958 年卒。

同大学院 理学博士 1963 年

東京大学原子核研究所、ワシントン大学准教授、

コペンハーゲン大学 N. ボア研究所 研究フェロー、

カリフォルニア大学理学部客員教授、

大阪大学理学部・大学院教授、核物理研究センター長

ワシントン大学客員教授、国際基督教大学教授、国際高等研究所フェロー、高輝度光科学研究センター参与、

核物理委員会委員長、学術会議原子核専門委員幹事、

山田科学振興財団理事、理事長、学術参与

1992 島津賞 ニュートリノ核物理研究、

2004 ICU Othmer 記念教授章、

2000-2020 年間 ニュートリノ核物理優秀論文賞 2 件

F. Schmidt and D. Bodansky 著、江尻宏泰 江尻美也子
訳、原子力への挑戦 ブルーバックス。講談社

H. Ejiri, M. Voigt, Electron Gamma Spectroscopy in Nuclear
Physics, Oxford 出版

江尻宏泰 櫛田孝 編 量子の世界 大阪大学出版

H. Ejiri, et al., Nucleon Hadron System, Oxford 出版

江尻宏泰 クォーク・レプトン核の世界 裳華房

江尻宏泰 物質の究極 講談社 ブルーバックス



江尻宏泰 素粒子がわかる本 サイエンスアイ
江尻宏泰 原子力と放射線 サイエンスアイ
江尻宏泰 海の詩 写真集 サファイア出版
江尻宏泰 採光のソナタ写真集、サファイア出版
江尻宏泰 豊かな無の世界 パブファンセルフ出版
江尻宏泰 大学は必要か パブファンセルフ出版